

昭和二十四年七月二十三日
昭和五十四年十二月十五日
第三種郵便物認可
発行（毎月一回・十五日発行）

（通第三六六号）

慈

光

第三十一卷

第十二号

次

目

悲 歎 述 懷 ……………	近角常觀……………(1)
撰 取 不 捨 の こ と わ り ……………	白井成允……………(9)
聞 思 錄 抄 ……………	誉田豊吉……………(13)
自 照 日 誌 抄 (16) ……………	西元宗助……………(16)
念 仏 詩 抄 ……………	木村無相……………(18)
釈 迦 微 笑 の 素 懷 ……………	花田正夫……………(21)

悲 歎 述 懷

近 角 常 觀

聖人は常に悲歎述懷の声を絶たれなんだ。実に聖人の悲歎述懷は御見をもつて我等が罪を知らして下された御教化である。そして同時に、その罪業の我が身を救いたまう大悲の御恵みを知らして下さる仰せである。

誠に知んぬ、悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快(たのし)まず、恥ずべし、傷むべし矣。

との御悲歎は、如何にも痛酷、骨身に徹する次第である。実に我等は愛欲の塊(かたまり)である、名利の奴である。身にあらわると、あらわれぬとの区別こそあれ、他人の行いは即ち私の行いである。社会の現象はみな自己心内の反影である、自己の周囲は自己の鏡であり、外界の出来事は私の心の客観化したのである。求道といい、信仰といい、知らず識らずの間にわが身を飾る看板となり、懺悔といい、告白といい、頭を下げるという頭を上げることになる。何

処までも名聞利養につきまとい、愛欲五欲は肉体のあらんかぎり伴うて居る。

聖人が「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懷けばなり」と喝破せられたのは、我等が罪惡煩惱の肉塊にすぎないことを根底的に宣告せられた聖訓である。虚名の看板はおろしてしまいがよい、殊勝の金箔ははがすがよい。聖人が、恥ずべし、傷むべし、と投げ出されたのは他人事ではない、私自身の身の上である。聖人が愚禿々と告白して、内は愚にして外は賢なり、とまで痛歎されたのは、如何にも悲歎の極みである。かくまで御悲歎下さるので、煩惱狂乱の我等も聖人の御伴をすることが出来る。よろこぶべきことも喜べず、浄土へまいりたき心のおこらぬ唯円房に、親鸞もこの不審ありつるに唯円房、同じ心にてありけり、と仰せられてこそ聖人の御手に引かれまいらすことが出来るのである。嗚呼勿体ない。

聖人の悲歎は決して絶望の悲歎ではない、厭世悲觀の叫

びではない。大悲の親心に満足して頭の下った懺悔である。歎異抄には

聖人の常の仰せには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ、と御述懷候いしことを

とある。ああこれ悲歎述懷のお心根である。我等の惡業煩惱が深重なればこそ、大悲のみ胸をいためたてまつりて五劫永劫の御苦勞をかけたてまつったのである。それにつけても、かねてより常に仰ぎたてまつった涅槃經の御文が入りがある。曰く

如来は一切の爲に、常に慈父母と作りたまえり。まさに知るべし、諸の衆生は、皆是如来の子なり。世尊の大慈悲、衆のために苦行を修し給うことは、人の鬼魅(きみ)に著せられて、狂乱の所為多きが如し。

とある。実に我等が煩惱熾盛の有様は、人の鬼魅に著せられて狂乱の所為多きが如くである。而してこれをみそなわす大悲の親心はまだ鬼魅に著せられて狂乱所為多きが如くにてまします。狂人走れば他の人もまた走る、我等が煩惱狂乱につきまといたまう大悲の親心は、矜哀憐愍のために狂乱の態にてまします。かくまでのお慈悲ありてこそ煩惱

狂乱の我等も救済されて正体に立ち返るのである。五劫思惟も永劫の御苦勞も畢竟この狂乱の私をたすけたまう如来大悲の御狂乱にてまします。実に不可称不可説不可思議の願海、これである。

「如意」の釈にこの意味があらわれてある。曰く、「如意と云うは二種あり、一は衆生の意の如し、彼の心に随うて皆まさにこれを度すべし。二には弥陀の御意の如し、五眼まどかに照らし、六通自在にして、機の度すべきものをみそなわして、一念の中に、前無く後無く、身心ひとしく赴き、三輪開悟して、各々益したまうこと同じからざるなり」

と衆生の意は実に煩惱の鬼魅に著せられて、狂乱所為多き心である。弥陀の御意は、五劫永劫の御苦勞、十劫以来の御待ちかねの親心より、種々に善巧方便したまう思召である。この狂乱の我等のために種々善巧の御苦勞まします。

歎異抄九章の「天に踊り地に躍るほどに喜ぶべきことを喜ばぬにて、往生はいよいよ一定と思いたまうべきなり。喜ぶべき心をおさえて、よろこばせざるは煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりと知られていよいよ頼しく覺ゆるなり」との教化、全く我等が煩惱狂乱の所為と、これをしろしめす如来大悲

の煩惱具足の凡夫と呼びかけ給う親心とを示したまうのである。実に阿闍世王の逆悪は鬼魅に著せられて狂乱の所為である。しかしてこれを救済し給う世尊、大慈悲をもって御苦勞下さることもまた鬼魅に著せられて狂乱ども申すべき、常識を超えたる超世無上の本願醍醐の妙薬である。

かえすがえすも我等がいただかねばならぬことは、大悲の親心は私の罪惡の隅々より煩惱の奥底まで知り抜きて憐れみ給う事である。人が逆境に沈淪し、苦悶の極に達するときは自暴自棄に流れるものである。何人も我を理解してくれるものはない、誰も決して自分を同情して呉れるものか、なお進んで言えば、同情してほしくもない。人の心などは、とてもとても喰い足らぬ。たとい人が如何程いいと云つてくれても自分でよいと考えられない。他人の我をよいと云うのはなお惡しき点を知らぬゆえ、かく買いかぶりに居るのである。もし飽くまで我心の奥底まで知り抜きたらば必ず必ず飽きはてて我を斥けるに違いない。如何なる人の同情も、如何なる慈悲の涙も、自分の心の奥には届かぬ心地がする。これ実に逆境に沈淪する時の心持である。然るにここに大いに注意すべきことは大悲の親心には、かねて我等が心の底を知ろしめすことである、底の底まで見抜きたまうことである。大悲の徹底するは私の方より徹底するのではない、大悲の方より底の底まで徹して下さる

難化の三機、難治の三病は大悲の弘誓をたのみ、利他の信海に帰すれば、これを矜哀して治し、これを憐愍して療したまう、たとえば醍醐の妙薬の一切の病を療するがごとし。

と仰せられるが実にこの点である。この矜哀、憐愍の思召がありがたい。普通の病人でない、尋常の悪人ではない、その病膏肓に入る点を診察し、その惡逆の心の奥底まで腐蝕しているのを御承知である。而もなおあきれず、斥けず、我退いて引き下がらんとする手を執りて涙を注ぎ、我墮ち来る地獄の底に座を同じくして哀愍授受の御親心をひらきて下さるのである。如何なる逆惡の私もその大悲に感泣せずには居られぬ。如何に邪見の水で張りつめたる心も、慈悲の春風には融けずには居られぬ。三途の黒闇光啓をこうむるというは實に此処である。如何にも我等は暗黒の暗黒である。されど御慈悲はその底の底、隅の隅まで見抜かれ、あきれず、見捨てず、あわれみたまう大悲大願にたましますと聞けば、我身ながらあきれはてたる狂乱煩惱の我なれど、大悲深重のご苦勞はかくまでとはあきれはてたる不可思議の大慈悲にてましますと、唯々弥陀智願の広海に帰入したてまつるよりほかない。

大聖釈尊が阿闍世王を救済したまうが実にこの有様が人生的に歴々とあらわれてある。先ず釈尊は、王の罪は如何

のである。心の底を極め、惡の底まで知り抜き、地獄の底まで御身を落して下されて、我等と座を同じうしての御慈悲である。私が苦しんだ時、如何ほどお慈悲を聞いても、人の同情を頂いても喰い足らぬことは自分と席を同じくし、境遇を同じくして察してくる人のないことであつた。とかく従来聞法の上において不徹底に陥る点は、私は悪くても助けて下さるといふことである。畢竟するに悪くても可い、悪くてもかまわぬという様な意味である。悪くても可い、悪くてもかまわぬといわれたのでは、實際問題においては喰い足りぬ。私とても決して好んで苦しむものではない。たといそれで可いと云われても煩悶は去らぬ頭はさがらぬ。さればと云つて惡しきを去ることが出来るとは思わぬ、一点も回復することは出来ぬ。唯願うところは、私と境遇を同じくし、性質を同じくし、所作を同じくし、苦痛を同じくして、如何に苦しむも、もつともである、惡いに違ひなければ、その惡しき心が止まぬところが憐愍に堪えぬ。如何にも狂乱の所為なれど、その性質が可哀想である。鬼魅に著（くる）わされたればこそ、その様なことをするのである。煩悶の所為によつてかうなつたのであると、飽くまで境遇も性質も罪惡も煩悶も、徹頭徹尾理解して、しかも見捨て下さらぬ人が欲しい。しかして実にこれが如来大悲の親心にてまします。聖人が信巻に、

にも重けれども、自ら手を下して殺したのではないから、なお重いと云われぬと仰せられた。この罪は此上もなく重いには違ひないが、仏の大悲は、これをもつて重しと認めたまわぬのである。願力無窮にましますれば、罪業深重もおもからず、である。

特にその以前に阿闍世王が月愛三昧の光によつて、まず病氣がなおつた時、耆婆曰く、仏は先ず王の身を治して心に及ぶ、と申された。すると王は驚いて、如来世尊は我を念じたまうや、とたずねると、耆婆が答えて曰く、たとえば、若し七人の子があるとき、この子の中に病む子があると父母の心は、どの子も平等に可愛いのであるが、病む子の事が一番心配である様に、如来もまた同様である。諸の衆生において平等でないことはないが、しかも罪ある者がひとえに心にかけて下さるので、放逸の者に仏は慈悲をおこして下さり、不放逸の者には御心配はなされぬとある。

これは實に、仏智無辺にましますば、散乱放逸もすてられず、である。この様に仏の大悲大悲をもつて阿闍世王の惡逆をもなお重しと認められずして、なお進んでその罪をば仏自ら負いたまうのである。曰く、

「王若し罪を得るならば、我等諸仏世尊はまた罪を得べし。何となれば汝が父、先生頻婆沙羅は常に諸仏において善根をうえたりき。この故に今日王位に居することを

得たのである。我等諸仏世尊がその供養を受けざらましかば、王たらざらまし。若し王たらざらましかば、汝、国のために害することを得ざらまし。若し汝、父を殺して罪あるべくは、我等諸仏もまた罪あるべし。若し諸仏罪を得たまふこと無くんば汝独り如何んぞ罪を得んや」と。これ実に如来が阿闍世王の罪は即ち我罪なりと認めたまうたのである。これいわるる牀を同じく境遇を同じくし罪を同じくし、責任を同じくし、結果を同じくして、身をもつて阿闍世を救いたまう如来の大悲にてまします。これを釈尊のお言葉をもつて仰せられてあるならど、全く阿弥陀如来の弘誓、若し生者不取正覺の御思召である。

若し衆生罪あるべくは我等諸仏また罪がある。衆生が地獄へ落ちるならば我もまた地獄へ墮つべきである、とは、たとい身を諸の苦毒の中に終わるとも、わが行は精進にして忍んでついに悔いじと仰せられたは、即ちこの思召である、もし十方の衆生我國に生ること能わずんば正覺を取らずとの誓である。反面から云えば、我正覺を取りたる以上は如何なる罪惡の者と雖も、いなむしる罪惡の者ほどこれを矜哀憐愍して助けねばならぬという誓にてまします。而してこの誓が成就し給いたが今日阿弥陀如来の自在神力にてましますば、十劫の昔、正覺をとり給いてより十方衆生に対し如何にして之を届けんと思召して下さる親心が、若

不生者の誓である。その誓あればこそあだかも弓の弦を張りたるが如く、御やる瀬なき親心は我等に届いて下さるのである。和讃に

若し生者のちかいゆえ信樂まことにときいたり

一念慶喜するひとは 往生かならず定まりぬ

とある。此誓の、やる瀬なき、はりつめた親心の弓の弦にて、はじめて信樂まことにときいたり、真心徹到して下さるのである。実に若し生者の誓は、衆生の罪を我罪とし衆生の苦を我苦とし、私共のために身を捨て、血を注ぎ、肉を積み、飽くまで私共に御慈悲を届けて下さる如来の御親心にてまします。実にこれ、世尊大慈悲、衆のために苦行を修したまふことは、人の鬼魅に著せられて狂乱所為多きが如くにてまします。

なお進みて仏は阿闍世王に、前世の業報、過去の宿因をお説きなされて、一朝一夕、今世今生のことでないことを示された。即ち頻婆娑羅王がビフラ山に遊獵して仙人を殺害したことである。其時仙人は死にのぞみて、我実に罪なし、汝心口をもつて殺害を加う、我來世においてまたこの如くかえつて心口をもつて汝の命を害すべし、と云うた。これ実に汝が父王を殺したる宿業の有様である。この宿業のあらわれとしてこの殺害が起りたのである。和讃に

頻婆娑羅王勅せしめ 宿因その期を待たずして

仙人殺害のむくいには 七重のむろにとじられき

宿業なれば、殺さじとすれども殺さねばならず、歎異抄十三章に「なにごとにも心にまかせたることなれば往生のためには千人殺せといわんにすなわち殺しつべし。然れども一人にても殺すべき業縁なきによりて害せざるなり、我心のよくて殺さぬにはあらず、また害せじと思ふとも百人千人を殺すこともあるべしと仰せの候いしは、我等が心のよきをばよしとおもひ、あしきをば惡しと思ひて本願の不思議にて助けたまうということを知らざることを仰せの候いしなり」とあるは実にこれである。狂乱の行為を誰がなさんと思ふものか、思わざるにこれを為すというのが即ち鬼魅に著せられるのじや、煩惱の所為じや。それが皆宿業の催すところじや、卯の毛羊の毛のさきにいる塵ばかりも作る罪業にあらずということなしである。もし願にはこりて罪を作るなれば、それも宿業の所為である。この宿業を了達し、三世に徹鑒（てっかん）したまいて我等を憐愍まします大悲大願の不可思議を仰ぎたてまつるの外はない。否仏の方より矜哀善巧の御手を下して、この宿業の我等を導きて下さるのである。唯々この慈悲の下に感泣し宿業を慚愧するばかりである。

仏の仰せはなおこれに止らぬ。過去の業報のみならず、現在煩惱の鬼魅に著せられて狂乱しているその心を憐み給

いて、それを察して下さつて曰く。

大王衆生の狂惑に凡そ四種あり、一には貪狂、二には藥狂、三には呪狂、四には本業狂なり。大王わが弟子の中にこの四狂あり、多くの惡を作るといへども、我ついに是人戒を犯せりと記せず、是人の所作三惡にいたらず、若し還りて心を得ばまた犯と言わず。王国を貪して父の王を殺害す、貪狂のために作れり、如何ぞ罪を得んや、人の耽酔してその母を逆害せんと、すでに醒悟して心に悔恨を生ずるが如し。この業、報を得ず。王今貪醉せり、本心の作せるに非ず、若し本心に非ずば如何ぞ罪を得んや、と。

実に如来の大慈悲は、かくまでも徹底して下さるのである。かくまでも深く我等の心をみそなわし、知ろしめして飽くまで矜哀憐愍して下さる、かかる大慈悲に遇いたてまつて見れば、不可思議なる哉、阿闍世王の心中、忽ちにして無根の信心開發して改悔懺悔の念やみがたく、曰く。

世尊、我世間を見るに伊蘭子より伊蘭樹を生ず、伊蘭子より梅檀樹を生ずるを見ず、我今始めて伊蘭子より梅檀樹を生ずるを見る、伊蘭子とは我身これなり、梅檀樹とは我心の無根の信なり、

と仰せられた。実に不思議なる哉、無根の信があらわれた。無根とは我始め如来を恭敬することを知らず、法僧を信ぜず、これを無根と名づく。世尊、我もし如来世尊に遇

わずらば、まさに無量劫に大地獄にありて無量の苦を受くべし。今われ仏を見たてまつる、仏を見たてまつるを以て得る所の功德、衆生の煩惱悪心を破壊せしむと。これ実に如来の大慈大悲をもって心中煩惱の賊を滅し、狂乱所為多からしめたる鬼魅悪魔を退治して下されたのである。実に六趣四生の因亡し、果滅す。実に無明の酒を醒まし、三毒の毒を消し、永劫流転の繫縛を解き給うのである。

仏言わく。大王、善哉、善哉。我今汝が必ず能く衆生の悪心を破壊することを知れり、と。即ち本願円頓一乗の醍醐は煩惱具足、逆謗闢提ことごとく摂受して、煩惱の水解けて、功德の水としたまうことを信知せりと宣う。

其時、阿闍世王、告白して曰く。世尊もし、我審かに能く衆生の諸の悪心を破壊せば、我常に阿鼻地獄にありて無量劫のあいだ、諸の衆生の為に苦悩を受けしむとも以て苦とせずと。もとより地獄必定の身なれば、ただ仏のお慈悲だにましませば、このお慈悲を衆生に知らすことが出来れば、無量永劫地獄に落ちたりとも、さらに後悔はないとの覚悟である。これ実に阿闍世王が全身を投げ出しているの懺悔である。実にこのためにマカダ国の人民ことごとく菩提心を起し、夫人、後宮みな無上道心をおこしたのである。これは実に阿闍世一人の救済ではない。すべての逆悪の者を救い給う如来大悲の実現にまします。否大聖一代の御教化は

つまりは此の如き不可思議の大慈悲の外はない。実に如来入滅の時にあたりて、仏陀が慈悲の無限無辺なることをあらわされたのである。実にこれ涅槃醍醐の味で本願一乗の真意である。

阿闍世王感謝して、著婆に語りて曰く、我今いまだ死せずしてすでに天身を得たり、短命を捨てて長命を得たり、無常の身を捨てて常身を得たり。諸の衆生をして無上菩提心を発さしめたり、と。而してここに彼の偈文がある。

如来は一切の為に、常に慈父母と作りたまえり、
当に知るべし諸の衆生は、皆これ如来の子なり
世尊大慈悲、衆のために苦行を修し給うことは
人の鬼魅に著わされて狂乱所為多きが如し
我今仏を見たてまつることを得たり

得る所の三業の善、願くば此功德を以て
無上道に廻向せん。我今供養する所の仏法及衆僧
願くば此功德を以て三宝常にましまさん
我今獲べきところの種々の諸の功德

願くば此を以て、衆生の四種の魔を破壊せん
我悪知識に遇うて三世の罪を造作せり

今仏前に於いて悔ゆ、願くば、諸衆生と等しく
悉く菩提心を発せしむ。心を繫で常に十方一切仏を
思念せん。復願くば諸の衆生、永く諸の煩惱を破り

了々に仏性を見ることが猶妙徳の如く等しからむ、と。

実にこれは阿闍世王一人の懺悔ではない、我等煩惱狂乱のもの如来の大悲に遇いたてまつりて真心徹到して、改悔懺悔の心を告白して下されたのである。聖人が、濁世の庶類穢悪の群生、金剛不壊の真心を求念すべし、本願醍醐の妙薬を執持すべしと仰せられたはこれである。

而してこの涅槃經の文を引かれた前に、彼の悲歎の文を冠せられたのを見れば、実にこの阿闍世王の懺悔は我等に代りて即ち聖人御自身の懺悔なりと、おそれながら仰きたてまつる次第である。和讃に曰く

大聖おのおのもろともに 凡愚底下のつみびとを
逆悪もらさぬ誓願に 方便引入せしめけり

古の王舎城のことではない、現代現時の事柄である。他人の事ではない、現に私自身の事である。この凡愚底下の罪人を底の底までかくまで身を沈めて救いたまう如来大悲の本願他力の真宗にまします。実にいつまでもいつまでもますます罪の極、地獄の底に沈淪する我等である。仰ぐところは弥陀廻向の御名、如来大悲の願船ばかりである。聖人の晩年、愚劣悲歎述懐和讃に曰く。

浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし
虚仮不実のわが身にて 清浄の心はさらになし
外儀の姿はひとごと 賢善精進現ぜしむ

貪瞋邪偽多きゆえ

奸詐ももし身にみてり

悪性さらにやめがたし

心は蛇蝎のごとくなり

修善も雑毒なるゆえに

虚仮の行とをなづけたる

無慚無愧のこの身に

まことのころはなけれども

弥陀廻向の御名なれば

功德は十方にみちたまう

小慈小悲もなき身に

有情利益はおもうまじ

如来の願船いまさずば

苦海をいかでかわたるべき

心光のあと

福島 政雄

昭和二十六年

まことなき身をかへりみず世に立ちてまことありげなる
此の身淋しき

御仏のまことのいのちしみじみと身にしみわたりただ念
仏する

幾ひとの恵みを受けて生くる身のふかきおもひに年も暮
れ行く

さもあらばあれ暮れ行く年も永劫の御仏のまこと身に受
くるわれ

摂取不捨のことわり

白井成允

一、徳大寺の唯蓮坊「摂取不捨のことわりを知りたい」と、雲居寺の阿弥陀に祈願ありければ、夢に、阿弥陀の今の人をとらえたまうに、逃げけれども、しかととらえてはなしたまわず。「摂取というは逃ぐる者をとらえておきたまうようなること」と、ここにて思いつきたり。これを引言に仰せられ候。(二〇五条)

「摂取不捨の道理を知りたい」これが唯蓮坊の願いでありました。

恐らく唯蓮坊に取つて、この願いは久しき痛ましき願いであつたでしょう。彼は道を求め法を聞きつつ、いかにしても心がその法の通りにならないのに苦しんでいたのです。摂取不捨の道理は、すでに久しく聞かせられていた、阿弥陀仏は念仏の衆生をみそなわし摂め取りて捨てたまわず、必ず浄土に迎えたまうということは、幾たびも聞いていたことでしよう。けれども、そう聞いても心がおちつか

ない。阿弥陀仏が摂めとりて捨てたまわれないとは如何なることであろうか。それをはっきりして安心したいものである。それがはっきりしない間は、いくら法を聞いても自分は何の通りの不安に包まれるばかりである。こんな心持がこの願いには溢れているように思われます。

然しこれは法を求めつつある人の一般の悩みでありますまいか。今唯蓮坊においては、この不安とこの願いとは、終に祈誓にまで昂揚（こうよう）しました。不安にとらわれて、じつとしていることが出来ないで、その不安を彼の御寺の御本尊様に申しあげ「どうぞしてこの不安をはらわせたまえ、この願いを叶わせたまえ」と祈りつつ、その祈りの遂げられるために自分の心身を挙げて誓いまつたのであります。

人の心が何事にか凝り固まるときには、遂に祈りとなり誓いとなるのは自然です。凡そ祈りの心、誓いの念いは、人の何か切なる経験にあたつて自然に湧き出てくるもので、

まい。

いかんとも為し難い。それが恐らく諸々の宗教の源となり、或は本質となつてゐる心の現象でありましょう。そしてそれが道徳的に純化された性質のものであるとき、それは恐らく人文の高き価値を成してくるものでありましょう。今唯蓮坊におけるこの祈りは、阿弥陀仏に對して、摂取不捨の道理を聞かせていただきたいという内容のものであります。

唯蓮坊は夢においてこの祈誓に答えられたのです。夢はしばしば人の心の最も深く凝り固まつたときに現われるものでありまして、自分が醒めてゐるときには自覚もせずにあることでも、もしそれが夢に現われるならば、それは自分の心の奥底に潜める深き自分の要求、又は関心が、さながらに固まり現われたものと思えばよろしいのです。宗教の伝説に夢の物語が多いのは自然の事です。それは人の心が明かなる知識として自覚されないでおりながら、そのごとく自覚されたものよりも、更に一層深く強く久しいところの己れ自らをいみじく暴露する作用であり得るから、知識で捕え得ないものも夢によりて直観される。その直観はしばしばその人の久しき心の要求・深き強き努力の結晶として、その人格の潜める奥底から湧き出したものであるが故に、その人にとりてその人の生命を解決する縁として作用することのあるのも、敢て不思議なことではあります。

私共は自分が如何なる夢をみるかを反省しなければならぬ。愛欲・名利、あまりにもあさましい自分の真相が、夢によつて真に自分にさらけ出されることはないか。それをごまかしてよいかげんに夢だとして忘れ去ることなしに、夢なるが故に、更に深き自分を語りくれるものとして大切に省みねばなりません。

今、摂取不捨の道理を知りたいとの祈りに答えられたこの唯蓮坊の夢は——その阿弥陀仏が唯蓮坊の袖を捉えたもうた、驚いて逃げようとしたけれども、袖をしつかりと掴んで、どうしても放して下さない——というのでありました。「摂取というは逃ぐる者を捕えておきたまうようなることと、是れにて思いついた」と、唯蓮坊はこの夢で、久しく祈つてゐた摂取不捨のことわりが、しみじみと身にしみてわかつたのです。

この夢、この領解、これはありがたいことであります。私共は真実には唯逃げようとはかりしています。久遠劫より此世まで、一念忽ち迷いはじめ、迷い来りては、迷いの業因果相繼いで、魂のまことのふるさとを離れること余りに遠く隔たつてしまいました。ここに私共の心も身も世界も迷いのものとなり、苦しみのもものとなり、独り汚れたる罪のものとなつてしまいました。これは私共の自業自得

であります。然るにこの私共のあさましき業因業果を見て、大覺の如来は、あわれと思召し、いかにしても此のあさましさから私共を救いあげて、如来の常樂我淨し永久、安樂、自由、清淨なる徳をそのままに私共の徳たらしめ、私共をして如来の境涯を証らしめなければおかまいと、願をおこし、行を成就し、その果徳を私共に恵みたまう。そのために如来、即ち私共をあわれみすくいます真実の御親様は、ただその御果徳を——それによつて私共が自然に、如来の御徳に化され、御徳をさとらしめていただくにちがひなき御果徳を——即ち御名号を私共に恵みあたえますのであります。

私共はすでに久しい昔より此の親様のお慈悲の結晶を恵まれていながらも、これに気づかず、これに背き、久しくこれを無視して来ました。親の御許を距ること余りに久しく遠かりしがために親の御心を知らず、これを聞かされても気づかず、心が石のように冷たく固まつてしまつていたので、どうすることも出来ないものであります。

何という冷たい心でありましょう。親の温い涙をうけいれようともしないで、自分の煩惱の固い殻の裡にとじこもっている。ここには光明もない、真実もない、唯だ我執に固まつた醜い存在があるのみです。此の如きすがたは親様の堪え得ざるところであらせられる。私共は自分を知らず、

自分の親を知らず、おこり迷うているのに、親様は、汝こそ我が子ぞと呼びたまひ、子の真相（ますがた）を知らしめし、子のおこりと無智とをみそなわし、御生命にかけこの子を救いたまう。私共が親様を知ろうともしないでいるのに、立つて御名を現わし、御名を諸仏に讃歎せしめ、種々に善巧方便して御名を私共に聞かしたまうのは、唯だ一つこの御親のお慈悲のおはたらきであります。

このおはたらきが、久しき古から不斷に不休に私共に向つて注がせられています。私共がそれから逃げようとばかりしているのに——久しき無智の故にこれを疑い、深き驕慢の故にこれにそむき、しつこき懈の故にこれを聞くを厭い、かくていつもいつも逃げてばかりいるのに、一念子を救わんとする程、いよいよ速く追いかけたまい、遂に私共を捕え果すまでは休みたまうことはないものであります。摂取不捨とは、逃げる者を捕えておきたまうようなことと唯蓮坊が知つたのは、この親様の御手が唯蓮坊をしつかりとつかみきつておしまひになつたので、唯蓮坊は逃げようとして逃げる事ができず、とうとうどうすることもできなくなつてしまつたときの叫びであります。

私共は親を知らずに逃げています。それを親様の方から追いかけて追いかけて、終に私共をつかまえて、また捨てたま

れと同時に、それを超えたる他力自然の御恵みに帰らねばなりません。

青蓮華

白井成 允

八十歳のうまれびちかき今日の朝友のめぐみを食すがたふとき 四十三年二月二日

はからひは消ゆれば消ゆれみほとけのおんはからひを聞くがうれしき

悪しきもの醜きもののいちいちをあはれみおはすおん悲しみよ

みほとけのみ誓ひ成れり罪業の荒野の暗路照り映ゆる見ゆ

小庭辺の小花をつみてみほとけにささげまつらんけふのおもひで

各々の花に百千の光あり光かがやくいのちとしも

わないのであります。私共は念仏を称えようとししないで我儘をしている。それをお念仏の方から私共の耳に入り心に泌み、遂に私共をして念仏もうさしめて下さるのであります。親様の方から私共のあさましさを御心配下され、このあさましい境涯から解脱せしめんとて、そのお慈悲の結晶を念仏として恵んで下さる、このたまわつた念仏をいただくことは、親様のお慈悲に気づかせて頂くと自然にそうなるのであります。念仏申すことも、往生させていただくことも、総べて親様のお慈悲から恵みたまわることであり、即ちただ他力の自然のあらわれであります。

唯蓮坊は久しき求道の果として、熱き祈誓の果として、このような他力自然のお念仏に気づかせられたのです。ここに唯蓮坊が求めざる前に、彼の求めしよりもはるかに大なる道がすでに自然にあたえられていたのです。ここに唯蓮坊が祈る前に、彼の祈りなどのおよびもつかぬ深き祈りが、すでに如来の方から彼に向つて注がれていたのです。唯蓮坊は今やかくのごとき如来真実の道を見た、親様の祈りを身に恵まれた。彼はもう求めたり、祈ったりするを要しない。一切はすでにすでに親様の方から与えられてあるのであった。その親様の御恵みの中に、彼は一切の繫縛を脱して自由な天地に出されたのであります。

私共は唯蓮坊の久しき求道をうやまわねばならない。そ

聞思録抄

譽 田 豊 吉

有意の自覚・無意の自覚

「信心獲得」というには、自分に覚りがなければならぬ。自覚のない信心ならば、それは夢のような信心である。信仰は実験であるというは、心に自覚することである。

然るに自覚に有意の自覚と無意の自覚とがある。有意の自覚は自ら努めて故意に自覚を計るのである。自らつとめて信仰を得たい、お慈悲をいただきたいとあせるのは有意の自覚を求めるのじや、仏の慈悲を頂くのじやと思うている間は、この「おれ」が邪魔になりて信仰も慈悲もいただけない。このおれはとも信仰を求め得る力はないと自覚して、仏にまかれるとき、始めて仏の慈悲を感じるのである、思慮も分別もない、唯仏の慈悲をうけたまわつて、ああ有難いと感じるのが無意の自覚である。火はあついものと思つたのは、まだ火を自覚したのではない。火はあついても、あつくないとも思わないで、唯火そのものに触れる

と、アツ、アツと感じる。これが真の自覚である。仏が護つて下さる、仏は慈悲の塊りと思つてゐるのは有意の自覚である。これは真の自覚ではない。仏の説明などは知らんで、唯仏そのものに触れて、ア、ありがたいと感じたのが無意の自覚である、真の自覚である。

こちらは進んで仏に触れるのではない。仏の方から触れて下さるのである。南無阿弥陀仏をもつて摂取して下さるのである。名号は仏の御はたらきであると思つのである。仏御自身とじきじきに感じさせてもらうのである。善知識の御言葉は仏の御言葉なりと思つのでない。仏御自身、罪惡のわれを助け給う御聲と感じさせてもらうのである。自己の方にすこしの力も、計らいも、思慮分別も用いず、直ちに仏の慈悲に触れるのが、無意の自覚、真個の自覚である。

信仰の第一義

信仰の第一義は慈悲に触れるにあり。慈悲に触れて始め

て、罪惡観、無常観を生ず。山伏弁円の入信はこの著るしい例証なり。彼は初め罪惡の自覚なく、浄土の欣求なく、憎惡、怨恨の心で仏に向う。然るに一朝、仏の化身たる親鸞聖人の慈悲に触れて、叩頭懺悔、真に道に入れり。

入信以前の罪惡や、無常や、不如意など、すべてお慈悲に触れしむべき仏の方便なり。種々の方便によりて、遂にお慈悲に触れ真信をいただくなり。されば、慈悲に触れざる間は、如何に求の、如何に念仏するも、これ真の信仰にあらず。

自己の真相

年をとるにつれて自己の罪惡無力のほどが益々わかつてくる。ささいの道徳でも出来ぬ。まして大きな道徳などとはとても実行は出来ない。疑い、怒り、貪る心は日一日に増してくる。それが地獄の業であると感じない。無欲、犠牲などは人にも説き、己れも行わんと思えども到底そんな高尚な行いはいはできない。すこし齒が痛んでも大騒ぎして気短く心苦しく、お念仏も出ぬ。教員の職におれども実は自己の生活のためである。口では生徒を愛するなどといえど心には何とも思つておらぬ。思えば自分ながら愛想がつきる。人が愛想をつかすのも最もじや。自己の真相を知れば、他人の善惡などは沙汰する暇などあるべきでない。只恥じ入つて頭があらぬ

實際問題の解決

われは自分としては實際問題を解決する力はない。どうするが利となるか、害となるか。善惡正邪など深く考えて行けば少しもわからぬ。されば、すこし許りの問題ならば或はわが力量で解決することが出来ても、こみ入つた事になれば到底解決はつかぬ。そんな場合は仏にまかれて、我をすてしもうたがよい。しからは自ら道は開ける。自己の智慧や力量で解決しようとかかる間は、なかなか満足な解決は出来ない、苦しいばかりである。かく問題にブツツかつて、苦しめる我を憫んで、全部引受けてよきように計らうて下さる仏にまかせれば、何等の心配もない。生きるも死ぬるも、得するも損するも、万事仏まかせ。利害得失を度外にして只仏にのみ打ち向えば、仏がおのずからよきように計らい指図し給う、實際問題の解決のつかぬのは我執があつて、死生、利害に迷うからである。仏に救われて浄土に往生する身になしてもうたうえは、この世の中に困難な問題はない筈である。

問題の解決（相対と絶対）

世間的に言えば、甲の主義にも一理あり、乙の主義にも一理あり、何れにも扇をあげることが出来ぬ。右にも行けず、左にも行けず、進退これきわまつて如何ともする能わす。苦悩に沈むのである。

かくても、如何にしても問題は解決せぬ。そのわけは相對の五分五分にかかずらっておるからである。皆が自己の主張がよいと思い「我」に執着しておるから、どうしても無碍とならず、衝突ばかりするのである。

このように相對的に争うている我々の上に、絶対の仏が現われて、我々の無明の暗を消して下され、ここに始めて解決がつくのである。吾々が仏に向つて秩序が出来、調和が出来るのである。絶対の仏は相對の人間界にあらわれてその働きを示し給うのである。

もし絶対が単に絶対として相對界の外にあるならば、我々に何の關係もないのである。悩める衆生の上に来り給う仏があるがたいのである、ここで万事解決がつくのである。

信者の心

眞の孝子は少しも自分の力を認めぬ。自分の力で孝行しているとは思わぬ。自分は不孝な者である。この不孝な者を愛して下さる親の御恩が実にありがたい。この御恩を思へばジツとしておることは出来ぬ。何とかして報恩をしなければならぬ。されど御恩の万分の一をも報ずることはできぬ。実に慚愧のいたりである。たとえいくら報恩の行をしたにしてもそれは自分の力ではない、親の親切の身に徹したおかけである。つまり親のお力である。眞の孝子は親の慈悲以外に何も認めぬ。

自照日誌抄 (16)

この日誌抄が皆様のお手もとに届きますのは、十二月のおしせまつてでございますようか。

誌友の皆様、歳末の御挨拶をさせていただきます。お蔭さまで、皆さまと同様、わたくしも亦、大悲護念のうちに、ただ南無阿弥陀仏でございます。

そうは申しあげますものの、只今はまだ十一月初日。この日時のズレは毎年、年の暮が近づきますと経験いたしますこと、それをおことわりしてペンをすすめることにいたします。

いづれ詳しくは、徳草師の「一道会の記」が本誌に掲載されることですが、去る十月二十八日(日)の一道会は、例年にもまして、まことに名実ともに盛会で、洛西の浄住寺は満堂の参加者でいっぱいでありました。

花田正夫、榊原徳草の両師をはじめ、井上善右エ門、中

信の心も亦この通りである。自分の力で仏を信じているとは思わぬ。われは曾無一善の凡夫である。この凡夫が仏のお恵みで助けていただき、信心を得させてもらうのである。無限の仏恩を思えばどうしても忘れんとして忘れることが出来ない、何とかして報恩のつとめをせずにはおられぬ。

されど、我は信をもらった後もやはり無力な罪惡の奴である。とても御恩に報いることは出来ない。出来ぬながら仏の御指図のまにまに、種々の仕事をさせていただくのである。自分には善をなす力はない、人を教化する資格はない。唯仏のお力われに入りこみ給うて、不思議のことをなさしめ給うことがある。自分はどこまでも地獄一定のいたずらものである。仏は何処までもこの仕方のない奴をあわれみ助け給い、この奴をお使い下さるのである。要するに、眞の孝子は自分は孝子とは思わない。眞の信者は自分は信者とは思わぬのである。

同行を敬え

同行は仏と一体のお方なり。同行の心中には、常にみ仏います。われらは眞の同行に接すること、生身の如来に對する思いあるべし。然るに我等は、同じ信者にても年齢の老少、容貌の醜醜、學識の多少、徳行の高低、地位の上下によりて、尊敬の度を異にすることあり、愧ずべし。

西元宗助

井玄英、山田宰等の諸先生、それに驚いたことにご病身の保木俊雄、村上速水の両師も、それに一時帰国中のロンドン大学仏教學教授の稲垣久雄師も。その他多勢の大徳の信士・信女が各地から遠路参じてこられまして、ほんとうに有難い一期一念のひとときでありました。

福井県の武生市の和上苑(たいへんよい名。施設も素晴しく宜しいとか)で、余生を送り給う、わが無相翁から、こまごまと近況をお報せいただいた書簡のその中に、親鸞聖人の「爾(しか)ればみ名を称するに能く衆生一切の無明を破し、能く衆生一切の志願を満(み)てたまう」(教行信証・行巻)のお言葉が、ありがたく書きしるしてありました。

この聖人ご自釈のお言葉は、目下行巻拝読中の私にとりましては、いわば聴きなれたお言葉である筈ですが、このように無相翁からあらためていただいて、衆生を宗助とわ

が身に頂戴いたしますと、このお言葉は金言となり仏語となつて限りなく深く重くありがたい。

それにつけ、近ごろ、つぐつぐ感じ思いますことは、「聖教読みの聖教知らず」のわが身ということでございます。

これも、このあいだから思うことなのですが、歎異抄第十四条の「この悲願ましますば、かかる浅聞しき罪人、

(宗助のこと) いかでか生死を解脱すべきと思ひて、一生のあいだ申すところの念仏は、みなことごとく如来大悲の恩を報じ徳を謝すと思うべきなり」という聖人の仰せのお言葉の意味深重なることであります。

如来のおん命のこもったお念仏が、そのまま恩報謝のお念仏になつていくのださるとは。そのありがたさ勿体なさは、なんとも申しようがありません。

○

聖人報恩溝の季節とはなりました。聖人のご生涯を偲ぶこと切であります。来月は、そのことを申し述べさせていただきますと存じております。少し余白があるようですので榎本栄一さんの詩を次に紹介させていただきます。

あわれ なにをしても

我流になります

この我流を

念仏詩抄

聞(もん)の一字に

香師おおせに

聞の一字に

聖道門の

あらゆる願行が

みな攝(おさ)まるゆえ

聞が肝要――

聞く聞く聞く聞く

聞く一つ

ただただただただ

聞く一つ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

なむあみだぶつ
照らされ

秀存師語録

ある女云く。われ往生を一定とすれども、わがこころ他事を思ひて仏恩を忘るるは如何にせん。

答えて云く。わが妄念を払わずしてその妄念の中から喜ぶなり。たとえば、座敷一杯に仕事をとりちらかした所に他人来る。まず、しばし待ちたまえと云いて、掃除して案内するなり。いたって心やすき内輪(うちわ)の人なれば、そのとりみだした中へこころおきなく通して、その中にて話しをするなり。これ他人と内輪との違いなり。この胸を改めて煩惱をおしのけて称えるは、弥陀を他人あしらいにするなり。妄念の中より称うるは阿弥陀仏と内輪あしらいにするなり。我心中をもとより知ろし召す阿弥陀仏なれば少しもかくすことはない、みな御承知故、妄念を払うことはいらぬ。

木村無相

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

驕慢

香師おおせに

聞くに骨おれよと

のたまうに

早や

聞いてしまった心に

なつてしまふ

それを驕慢という

聖人おおせに

邪見・驕慢・悪衆生

信樂受持甚以難――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

増上慢

香師おおせに
“信を得たりと思ふは
いまだ得ざるを
得たりとする増上慢
なり——”

得た得たと
得意（とくい）に語る
入信談

わが機たのみて
弥陀をたのまず

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

邪見

香師おおせに
“わからぬと思ひながら
それなりですましておくのが
邪見というもの——”

わかつたのが信心
でもあるまいが
わからなければ
聞くほかはない

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ウタガイ

香師おおせに
“ただ助かるハズで
助かると思つて

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

驕慢

香師おおせに
“わからぬムネを
もちながら
わかつたような心で
おるのが驕慢——”

わかつた
わからぬ
どちらでもよい
ただお助けは
誓願のお不思議

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ウタガウまで
ゆかぬ人がある”

ウタガウまでゆかぬと
ウタガイはれると
いうこともない
ウタガイはれるが
信心とのこと——”

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ



釈迦微笑の素懷

花 田 正 夫

釈尊の御晩年に王舎城の悲劇がおこった。釈尊にそむいて教団を統率しようとしたダイバにそのかされたアジャセが、父王を投獄して食を絶ち、それを助けようとした母后を宮殿の奥深く幽閉したのである。

万事休したイダイケ夫人は、はるかに釈尊に救いを乞い奉ると、目連と阿難を侍者として釈尊が王宮に現れたまうたのである。夫人は号泣して愚痴のありつたけを申し上げると、釈尊は黙つてその苦衷を聞きとられて、イダイの胸もすこし晴れ、どうか憂悩の無い処を教えて下さい、そこに願生したいと思ひます、と重ねて言上したのである。

私はここで夫人が、世間一般の人のように、どうしたらわが子の心を和らげるか、また夫王を救うにはどうしたらよろしいか、とは云つておられない、飽くまでも、自分自身の救いを求めているのに胸うたれるのである。私共の眼が外に向いていて、自分の周囲をよくすることばかりにかかりはてて、自分自身の解決に気づき難いのが常である、そ

れでは一時の凌ぎは出来ても、根本の解決にはならない。さすがに長い年月の間、釈尊のおそだてを蒙つていた甲斐あつて、聞法の原点に立つたのである。

すると釈尊は眉間から金色の光を放たれると、そこに十方諸仏の国土が現れ、夫人はそれを仰いで、やがて、諸仏の国土は皆清浄で光明に輝いていますが、私は西方弥陀の浄土に生れたいと思ひます、と申し上げると、釈尊は、微笑せられ、御口から五色の光を放たれて、夫人に告げられるには、汝いま知るやいなや、阿弥陀仏ここを去りたまふこと遠からず、彼の国で浄きみわざを成就して下さる仏をよく觀ぜよ、と勧められ、程なく夫人の信眼が開けた。

さて、夫人が何故に西方弥陀の浄土を願つたのであろうか。愚考するに、諸仏の浄土は皆立派であるが、母でありながらわが子の心さえも和らげ得ず、また妻でありながら夫王の生命を救ふことの出来ぬ愚か者には、諸仏の国に生れる行を修する力も智恵もないのに、弥陀一仏のみは、こ

の愚悪の凡夫を迎え入れて下さると知り、それに帰しまつたのである。そして、釈尊は帰すべきところに帰して行く夫人を見られて、御満足の微笑をあらわされたのである。

ここで、法然上人が聖覚法印やその他の弟子に語られた、上人の帰仏の實際を要約して見よう。

「あらゆる大乘の教をあまねく學んで見るのに、入門は異なつていても、皆仏性の一理を悟りあらわすことばかりで、皆一致している。そのみのりは深くすぐれているが、自分の根機ではすべておよび難い。又經典をひもといてみるのに、自分は智恵もなく、また修行もしたけれど、何一つ完うする力もない。朝な朝なに三惡道におちるより外にないことを恐れ、夕な夕なには生死の苦海を出ることのできないことを歎くばかりで、渡るに船もなく、闇に道を迷うたも同然であつた」

——黒谷源空上人伝——

「或時上人仰せられて曰く。出離の志が深かつたので、諸の教法を信じて、諸の行業を修した。一切の仏教は戒定恵の三學につきては、わがこの身は戒行では一戒をもたもたえず、禪定にしても一つも完う出来ない。人師の言葉に、戒行が清浄でなければ三昧は得られないと。ところが凡夫の心は物にしたがつて移り易く、たとえば猿が枝を

つたうようである。まことに散乱して、動じやすく、一心がしずまることはむづかしい。無漏（煩惱のまじらぬ）の正智などはどうして得ることが出来ようか。無漏の智劍がなくては惡業煩惱のきずなをたつこともできず、生死に繫縛された身を解脱するすべもない。

悲しきかな、悲しきかな。どうしようすべもない。ここに我等ごとき者は戒定恵を修行する器でもない。このほかに我が心に相應する法門はないであらうか。わが身にかんうた修行はないであらうかと、よろずの智者にもとめ、諸の學者におたずねしたが、教えて下さる人も、示して下さい方も見出されなかつた云々」——法然上人行狀畫圖——

「歎きながら如来の教法を習ひ、悲しみながら人師の解釈を學び、黒谷の報恩藏に入つて一切經を五遍も拝読したけれど、生死を出離できる道を見出すことも出来ず、愁ひがますますついても、學びのころは切実となつた。

幸いにも宿善が熟して、善導和尚の觀經四帖の書を拝見すると、末代造惡の凡夫の出離生死の意趣を説かれていた。あらまし読んで、まだ玄意は得られなかつたが、それを見出して、隨喜のあまり、身の毛がよだつてきた。そこでよく注意して三遍読み、前と合わすと八遍目に、觀經の散善義の、一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥、時節の

久近を問わず、念じ念じて捨てざれば、これを正定の業と名づく。阿弥陀仏の本願に順ずるが故に」という文にいたって、善導大師の元意を受得し、そのうれしさのあまり、ほかに聞く人もなかったけれども、余が如き劣機な者の救われる法を、阿弥陀仏がまだ法蔵菩薩でました時から、見きわめて下さっていたのか」と、思わず高声に唱えて、よろこびの涙とどめあえず、如来の選択して下さった念仏の一行に帰しまつた。齢は四十三、承安五年の春であつた。

＊

——黒谷源空上人伝——

時代は遠くへだたつていても、イダイケ夫人と法然上人と全く軌を一つにされている、当然な不思議さにこころうたれるのである。

＊

更に、いずれの行にても生死をはなれることの出来ない煩惱具足の身を自覺せられた親鸞聖人、その苦衷を理解される明師もなく、遂に叡山を下り、六角堂に参籠されて後世をいのり、九十五日の暁月に、聖徳太子の廟窟の偈の文によつて、浄土の教に自己の歩むべき道を見出そうとして法然上人を吉水の禅坊にたずねられたのである。

法然上人はこのとき六十九歳、今二十九才の親鸞聖人の口から、その求道の熱烈さと、行きつまりの苦衷を聞かれ

仏を申して地獄にもおちて候わばこそ、すかされたてまつりてという後悔も候わめ。いずれの行もおよび難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と、唯円房は聞きとられたのである。

＊

弥陀仏にたすけられるとよく聞くが、その弥陀仏は、たすかるよすがのない身をおたすけ下さるのである。誰れからも捨てられ、自分自身にもどうすることの出来ぬ身、地獄一定の身をたすけんと思召したて下さることを聖人方は身をもつてお知らせ下さるのである。

今度の大戰に、中支の戦線で亡くなった無名戦士の、最後の突撃を前に手帖に書きのこして、田舎の母に送つたものに、

たすからぬ身にしみわたるみ名の声

とあつた。文字通り死を前に、生死の巖頭に立つて、そこに如来のお喚び声、南無阿弥陀仏一つがきこえて、そのみ声に導かれて浄土にかえられたのであつた。

池山先生の最後のお言葉も

何もなくなる、何もなくなる

唯念仏だけがのこる、唯念仏だけがのこる

えらいこつたよ、ありがたいこつたよであつた。

て、そこに昔の御自分を見せつけられる気がして、満腔の同情をもつて、念仏裡に御自身の信のたどりを打ち明けたのである。

じつと聞きいつていられた親鸞聖人、師と仰ぐよき人の一言一言が、身にしみ髓にとほり、御自身に持合わした煩惱罪障の氷は、恩師の念仏無碍の光にとかされて、師弟一味の信水となつた。

恵信尼公の文書によれば「法然上人にあいまらせて、又六角堂に百日籠らせ給いけるように、又百か日、降るにも照るにも、いかなる大事にもまいりてありしに、唯後世のことは、善き人にも、悪しき人にも、同じように生死出ずべき道をば、ただ一筋に仰せられ候いしを、うけたまわり定めて候いしかば、上人のわたらせ給わんところには、人はいかにも申せ、たとえ惡道にわたらせ給うべしと申すとも、云々」とある。

歎異抄二条に「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別に子細なきなり。念仏はまことに浄土に生るるたねにてや候らん、また地獄におつべき業にてはんべらん、総じてもて存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて地獄におちたりともさらに後悔すべからず候。そのゆえは自余の行をばげみて仏になるべかりける身が念

秀存師語録

真宗の心のすえようは、行者の腰をすえんとすれども、流水に画をかく如くすえ難し。若存若亡して今度はすわりたように思うても変るなり。如何にせば変らぬ様にすわると云うに、阿弥陀仏の因位永劫の御すわりを思うべし。五劫に思惟してたのむばかりで助けんとすわり、苦毒の中をも忍んで修行して必ずたすけんとすの御すわりなり。即ち仏の決定心なり。この仏の決定心が行者の決定心となり、仏のすわりがわれらのすわりとなるなり。さらに何の造作もなしとのたまふ。造作すれば仏の機に入らざるなり。仏は機の造作をきらいたまふなり。

？

密正云く。「こそ」は他につけるべし、手前につけるとむつかしきなり。子は親なればこそ、親は子なればこそと思いたきなり。夫婦、兄弟みなしかり。

又衆生は、阿弥陀様なればこそと思ひ、阿弥陀様は、罪ふかければこそ助けるぞとのたまふなり。

私に案ずるに人多く法をきけば衆生の方に助かる力が出て往生すると思ふでもしからず。法を聞けば衆生の方に助かる力のなき事がしれるなり。故に弥陀をたのまねばならぬ。弥陀のお力のみをたのめば浄土に往生するなり。

あとがき

歳末になりました。お忙しいことと存じますが、御無事で御越年の程を祈念いたします。

十二月は近角常観先生の御忌月にあたりますので、すこし長文のお原稿を記載させていただきます。御味読願います。

又白井先生の御一代聞書により、摂取不捨の力強い光益を讀えて下さったものをいただきます。信をきいて自分がしっかりとしたいとなりがちですが、自分の中にしっかりとしたものはありません、仏力に摂取不捨されるお蔭で正定聚に住すことが出来るのであります。

誉田様は篤信な教育者として師範教育に異彩を放たれた方です。宗教教育とは、教育者自身の信徳が自然に学生の上に伝わるのでありますが、こうした信の歩みで感じられたものをのこして下さったのであります。

井上様は、十月末の一道会には御来会下さいましたが、十一月に姉上様が逝去され、また指を骨折されるなどで本月は原稿を頂

けませんでした。謹しんでお悔み申し上げます。また御全快を祈念しております。

西元様は、東奔西走、法味を有縁の方々にお頒ち下さって、たのしい限りであります。御無理のいかぬようにとひそかに念じております。

木村さんは、無事に和上苑に入られ、寝たきり老人の仲間に入って、この苑では一番元氣な方ですと喜んでいられます。唯あの人が自由に出られないのは淋しいことと遙察しております。

私自身小康を恵まれて居りますが、正月に七十六になります。瞑目して過ぎ去った歳月を思います時、文字通りに惨憺たるものであります。池山先生のお歌

惨憺たる悔いのこせし一一の

あとかたもなき無碍の一道

が浮かび、御名のふところにやすらわせていただいております。慈光も三十一年皆様方の御念力に支えられて続けさせていただきましたが、あとは芭蕉翁の熱田での句
いざさらば雪見にころぶところまで
に励まされております。来る年もよろしく
お願い申し上げます。

〈御案内〉

○毎月第一、第三日曜、午後一時半、一道会例会。一道会館の南隣り、南区駈上町二の八六。鬼頭康彦氏宅。市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。

地下鉄、新端橋終点下車。

○教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四月二十四日、午前・午後。市バス、御器所通り。又は北山下車。地下鉄、御器所通り下車。
○蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。(但し日曜を除く)尾西市三条板倉名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定価 半年 七〇〇円(送共)
一年 一四〇〇円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正 夫

電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷 人 坂部 光 雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八
發行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番
郵便番号 四五七